

説教者: 鄭南哲 牧師
じよんなむちよる

“あなたに問う”という簡単な詩があります。その内容は「練炭のすみをむやみにけつとばすな！あなたはだれかに一度でも心のあつい人だったのか。」簡単でありながら、自分がどう生きるべきなのかを考えさせてくれる文章だと思います。今日の聖書の本文もこのような内容です。本文の7節に“万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。”と書かれています。これは万物の最後、つまりイエスキリストが再びこの世をさばく為に来られる時が近づいたのでこう生きるべきという意味です。

1) 祈らなければなりません。 7節に“万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。”とされました。聖書は言い過ぎると思うほど祈りについて強調しています。そして聖書とキリスト教の歴史をみても祈る人たちによる歴史と言っても過言ではないほど、神様は祈る人たちに恵みを与えて下さいました。今日の本文にはさらに[祈る前に持つべき心構え]があると教えて下さっています。

1) 心を整えなければなりません。 ここで“心を整える”という言葉は健全な考えで落ち着いて、まじめであるという意味です。

①神様が私たちにいのちを与えて下さったことには確かな目的があります。しかし、いまの自分の姿はその目的にふさわしいのか深くかえりみ、行動することが心を整えることです。特に使徒ペテロがこの御言葉を記録するきっかけは当時イエスを信じる人々の中で“イエスがこの世をさばく為にもう再び来られる時が近づいたのでイエスを迎えるために待つべきである。”と言いながら何の働きもせず、ただ祈ることだけに熱心な人たちがいました。ところが、働きをしなかったので、当然食べるものがなくなりました。それで、他の人々に行って“もうすぐイエス様が来られるので、食べ物に分けてちょうだい。”という人たちがいました。しかしみなさん、これはとっても間違った信仰生活の態度ではなかったでしょうか。なぜなら出エジプト 20:8-10に“安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も—”とされました。これを言い換えると神様に尊く用いられる人は自分の仕事に忠実な人です。ですから神様は私たちがここにおかれた目的をしっかりとつかみ、その目的のために全力を尽すことにより心を整える生活となることを願っておられます。

②心を整えるもう一つの意味はすべてのことにおいて度を過ぎないで落ち着いて、前後ろを察する知恵があることを意味します。たとえば、自分の家族、職場、社会、世界で起こっている諸問題によって感情的に巻き込まれ左右されず、娯楽(ごらく)や物や事などにはまっけてしまって家族をないがしろにすることなく、信仰生活を後回しにしないで、楽しめることができることを意味します。

2) 身を慎まなければなりません。 ここで“慎む”という言葉は、①本能的な欲求を節制することを意味します。たとえば、食べ物を食べたい欲求を節制して健康を維持する、物質的な所有に対する欲求を節制して所有欲に左右されないようにし、必要な人々に分け与えるために用いることなどです。イエスを信じる人は自分がやりたいほうだいでははいけません。どんなにいいこともやりすぎて有益になることはありません。車を運転する時アクセルばかり踏んで走ると、確かに速く走れて気持ちも良いかも知れませんが、ずっとそのまま走ってしまうと、エンジンが焼けるか、前の車にぶつかってしまうでしょう。節制(自制)は人生のブレーク役です。だからこそ大切です。ガラテヤ人への手紙 5:23 の御霊の実の一つが自制です。みなさんは最近言葉に、行動に、思い、感情をよく自制していますか。②心を強くし、気落ちにならないように気をつける態度を意味します。一般的に悩みがあったり、心配事があるとき、それを忘れるために人々はお酒を飲んだり、ある人々は麻薬を服用します。しかしイエスを信じている人は現実から逃げようとしなくて、むしろ積極的に乗り越えようとしなければなりません。もちろん、自分の力でできることではありませんので、神様の助けを頂きそれを乗り越えるために、神様は使徒ペテロを通して“心を整えて、身をつつしんで祈りなさい。”と言われたと信じます。③いつも目をさましていることを意味します。眠たそうな目をしてなまけて、大切なことを後回しにしないで、不規則な生活をしてはいけません。いつもどうすれば神様にもっと喜ばされるかを考え、心で決めたら、ためらわずにさっそく行動に移すことがつつしむことです。ある時は熱心であって、ある時はさめたりしないで、祈りの生活においても、ディボーションの生活においても、礼拝生活においても、神様の御前で規則的に生活することこそ、目をさまして生きるクリスチャンの行き方であり、自分の身を慎んでいることであると信じます。

3) すると、なぜ心を整え、身を慎まなければならないのでしょうか。? 一言で言うと心を整え身を慎んでいる人は神様に祈らざるを得ないからです。なぜなら、この世は自分の力で解決できないことがあまりにも多いからです。特に第一ペテロ 5:8で“身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのよう、に、食い尽くすべきものを捜し求めながら歩き回っています。”悪魔の

誘惑に負けないで勝利する生き方を願うなら我々は祈らざるを得ません。なぜ失敗意識にとらわれますか。祈らないからではないでしょうか。続けてあきらめないで祈る人は失敗にも、苦難にも神様の御心と目的があることを信じて感謝する力を得ることができるからです。祈るということは自分の力ではできないが、あきらめないで、神様の助けをいただいてでもかならずやりとげろうとすることを意味します。使徒ペテロをとおして最後の日が近づいたのでじばたしないで心を整え、身を慎んで目をさまして祈りなさいと言われた御言葉は当時の初代教会の信徒たちのみならず、いまを生きている我々にも同じく適用される御言葉ではないかと思います。新しく始まった2月、この一ヶ月ももっと気をひきしめて、目をさまして祈ることにより、神様の助けによって生かされますよう主の御名によって祝福します。

2. 最後の日が近づくほど、もっと人のあやまちを赦すべきだと教えています。

本文の8節 “何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。”と言われました。ここで“なによりもまず”ということは一番大切なので、優先的にすべきという意味です。ところがどうして互いに愛し合うことが大切で優先すべきことなのか。マタイの福音書 24:12 によると最後の時が近づくと“不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。”と言われましたのでイエスを信じる人なら、もっと愛することに力を入れなければなりません。

そして“熱心に”という言葉は運動場で走る選手が早く走るために全力を尽すことを意味します。ですから、イエスを信じている人は適当にではなく熱心に、愛し合わなければなりません。ところが、どういうふうに愛し合うことが熱心に愛し合うことでしょうか。いろいろ説明できと思いますが、大切なのは、ほかの人のあやまちと弱さを理解し、赦すことです。このように言い表せてもよろしいでしょうか。

歩きながらほかの人の家をのぞく事はありません。しかし、知りたいと思って、その家の金庫に何が入っているのか知ろうとして入ったのぞいてはいけないうに、ほかの人が何を考えているのかあまりにも深く、こまかく知ろうとしてはいけません。教会は信徒たちが来て安息し、慰められるところです。ですから教会は勝手に人の弱さや表だけを見て、お互い問い詰めたり、人の裏で突き止めたり、勝手に人に対して判断し、評価してはいけないうところです。なぜならイエス様は私の罪だけを赦し、愛してくださったわけではなく、すべての人の罪を赦し、愛してくださったので、そのイエスを信じている我々もほかの人のあやまちも赦し、愛さなければなりません。そしてイエス様は祈りを教えてくれる時マタイの福音書 6:12 で “私たちのおいめを赦してください。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦しました。”これを言い換えると神様、私がほかの人の罪を赦さなければ、私の罪をも赦さないでください。という意味です。

ですからほかの人の罪を赦すことこそ自分の罪が赦される近道であることを今月中も忘れないで下さい。愛するみなさん、今の時代はまことの赦しが必要とされる時代です。例)スペインである父親が家出をした息子を探し回りましたが、できなかったのも、新聞の広告にのせました。“愛する息子パーコよ。今までのすべては赦すよ。明日の正午 00 新聞社の正門の前で会おう。パーコを愛する父より”ところが、翌日、新聞社の正門の前にはパーコという名前の子が800人も来ていたそうです。これはスペインにこれほど“パーコ”という名前の人が多いという意味もありますが、一面、父の赦しを待ち望んでいる子どもがどれほど多いのかという意味にもなるでしょう。確実なのはみなさんも隠したいかもしれませんが、赦していただきたいことがあるかもしれません。同時にみなさんは忘れたかも知れませんが、みなさんの赦しを待っている人もいますかもしれません。大切なのは赦しあえるチャンスがいつもあることではないことを忘れないで下さい。ですから、神様の御前で心から悔い改め、自分の罪を赦していただくのみならず、ほかの人の罪を赦すことにも心を広げ、広くしなければなりません。

3. 最後の日が近づくほど、もてなし会うようにと言われました。本文の9節で“つぶやかないで、互いに親切にもてなし合いなさい。”と言われました。ここで“もてなす”という言葉は“愛”という言葉と“旅人”という言葉の合成語として直訳すると“旅人に愛を施す”という意味です。これを理解するためにはまず使徒ペテロがこの御言葉を記録するころの初代教会の状況を知らなければなりません。何よりもその当時は農業技術が発達しなかったため食料が足りず、貧しかったです。なのに出エジプト 23:14で “年に三度、わたしのために祭りを行なわなければならない。”と命じられユダヤ人たちは毎年三度エルサレムに行って祭りを行いました。当時は交通が発達しなかったもので歩いてエルサレムに行き、町によって何日も泊まらなければならませんでした。そういうわけでレビ記 19:9-10 で “あなたがたの土地の収穫を刈り入れる時は、畑の隅々まで刈ってはならない。あなたの収穫の落ち穂を集めてはならない。またあなたのぶどう畑の実を取り尽してはならない。あなたのぶどう畑の落ちた実を集めてはならない。貧しい者と在留異国人のために、それらを残しておかなければならない。わたしはあなたがたの神、主である。”と命じられました。彼らのためです。そういうわけでユダヤ人たちは伝統的に旅人をもてなすことを最高の美德として思っていました。イエス様の以後、約 200 年の間は教会の建物がなかったため、初代教会は信徒たちの家庭で礼拝を守らなければならませんでした。それだけではなく初代教会の当時はイエスを信じているわけで迫害を受け、ほかの町に逃げる人々も多くいました。大切なのは迫害を受け逃げていた人々はだいたい貧しかったため寝食を提供されなければいけない状態でした。ですから信徒たちが自分の家を開放することは初代教会において絶対的に必要でした。しかし、初代教会の信徒たちもあまりに

も貧しかったので、自分の家を開放するのはたやすくありませんでした。そういうわけで“つぶやかないで、たがいに親切にもてなし合いなさい。”と言われたのです。しかし、愛する 信仰の家族のみなさん! ほかに人々のために自分の家庭を開放するのは初代教会の時だけではなく、こんにちにも絶対的に必要です。世界キリスト教歴史において、特に韓国の教会が大きく広がったことを調査した報告書によると、大切な理由の一つとして信徒たちの 家庭を開放したセールグループの礼拝のためでした。なぜなら、人はだれでも新しいことを接する時、緊張したり、慎重になりますので、なおさら、イエスを信じていない人がいきなり、教会にまで足を運ぶことは決してたやすくありませんでした。しかし、自分の家庭に招待し、 交わるといやることなくより深く、楽しく交わりができるので、信徒たちの家庭を開放し、礼拝したり、信仰の交わりを保つことはとても大切です。

そして“つぶやかないで、互いに親切にもてなし合いなさい。”と言われる時は、単純な命令か勧めではなくそれにとまなうすばらしい祝福も含まれています。なぜならマタイの福音書 25:40 に“あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。”つまり神様から遣わされた人を受け入れることは神様を受け入れることであり、反対に神様から遣わされた者をしりぞけることは神様をしりぞくことになるからです。マタイの福音書 10:42 に“わたしの弟子だということで、この小さい者たちのひとりに、水一杯でも飲ませるなら、まことに、あなたがたに告げます。その人は決して報いに漏れることはありません。”とイエス様は言われました。みんなはどれぐらい自分の家をもてなすために、信徒との交わりのためにオープンしていますか。創世記18章でアブラハムは自分の家を通っている旅人のためにパンを作り、牛を取ってもてなしましたが、後になってみるとその旅人はなんと神様の二人の御使いだったのです。ですから、イエス様の再臨が近づけば近づくほど、ほかの人をもてなすことにもっと頑張らしましょう。

4. 最後に主の再臨が近づくほど 受けた賜物に応じて仕えあわなければなりません。本文の 10-11 節に“それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。語る人があれば、神の言葉にふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。”と言われました。ここで“賜物”は“才能”として理解すればいいです。しかし、賜物は生まれつきか、自分で努力して獲得したのではなく霊的な目的のために神様が与えて下さったことです。

ですから、我々が覚えるべきことは 1) イエスを信じる人はほかの人に仕えることに自分の賜物を用いるべきです。なぜなら本文の 10 節に“それぞれ賜物を受けているのですから”のように書かれているように神様は一人にすべての賜物を与えず、各一人一人にお互いが持っていない色んな種類の賜物を与えて下さいました。ですから人々が自分に与えられている賜物を持って神様に、そして他の人に仕え必要な部分を満たさなければなりません。特に教会内で信仰の弱い人たちが信仰にかたく立たされるように助けてあげなければなりません。たとえば、教えることが上手な人は日曜学校の教師として、歌が上手な人は賛美チームとして、やさしくて親切な人は礼拝の案内者として、勤勉で思いやりに情熱のある人はほかの人を助け、ケアすることなど多様な面において仕えなければなりません。しかし、残念ながら、神様は聖書によって霊的賜物について教えてくださったのに、それについてよく知らない人が多いです。イエスを信じている人は何をするにしても神様が栄光を受けるようにしなければなりません。本文の 11 節で“すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神が あがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン”と言われました。すべてのことをほかの人の関心を引くためにとか、自分の名を出すためにとか、自分の名誉と有益のためにするならとても間違った動機です。なぜならいま自分にあるものは自分のものではなくすべてが神様のものなので自分のためではなく神様のために使わなければなりません。そういうわけで第一コリント 10:31 でも“こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。”と言われました。

結論 今日のメッセージをまとめます。イエス・キリストがこの世をさばくために再び来られる時が近づいたと聖書は教えています。その日がいつなのか我々はわかりませんが、この2月ももう一度心を整え身を慎んで祈り、ほかの人のあやまちを赦し、互いにもてなし合い、奉仕する一ヶ月となりますように決心しましょう。これが教会生活の要素です。これを言い換えると祈りが無い教会は決して神様の御心と目的を知らないまま盲目的に走るところにすぎないし、赦しがない教会は戦争場と同じようになり、互いにもてないあいがなく、奉仕がない教会は祝福のない教会となってしまいますので、これらのことを覚えてもっと頑張らなければなりません。2月一ヶ月、さらに祈りに熱心で、互いに熱心に愛し合いながら、互いに熱くもてなすようにし、神様からいただいた賜物をもって互いに熱心に仕え合うことにより神様に栄光を帰し、我々を通して神の栄光が照らされる2月として生きますように主の御名によって祝福します。アーメン!